



教材研究で、より深い学びを

授業中、子どもは思わぬ発言をするものです。それが時として、授業の意図に沿わない場合だってあるでしょう。でも、子どもがそう反応するのには、何か理由があるはず。発問のしかた、あるいは教材の個性がそうさせていると考えることもできます。

授業の意図ももちろん大切ですが、子どもの反応に意味を見いだし、立ち止まって考えれば、より深い学びの世界への入り口に立つことができるかもしれません。

そう考えると、大きく分けて二つの教材研究の目的が見えてきます。「その教材を使って教えなければならぬことを明確にすること」と「それを超えた、教材の可能性に気づいた子どもを受け止める準備をすること」。教材研究では、この二つをバランスよく満たす必要があると、私は考えています。取り組むときには、次の三点を押さえるとういのではないでしょうか。

1 「教えたいこと」との関係で

まず、教材の特徴や仕組みを、「教えたこと（指導目標）」との関係で捉えるこ

とです。初めにお話した、教材研究の目的の一つ目に関わります。これをはっきりさせないことには、授業ができません。

特に説明文では、論理を発見すること、写真や図表の使われ方を理解することを大切にしたいですね。

2 教える以上のことを

次に、教える以上の内容を、自分なりに読み解いておくことです。これは、目的の二つ目につながります。

教材は、教科書での位置づけ以上の可能性を秘めています。授業で子どもの気づきをすくい取るためには、教師が指導目標だけにとらわれない目で、教材の特徴や仕組み、個性を捉えておく必要があります。青山先生が、「自分で分析をしたうえで学習ページを見る」という方法をとったのにも、こうした意図があるのだろうと思います。

3 「一読者」として興味をもって

最後に、素直な気持ちで読んで、教材のおもしろさを教師自身が楽しむことで

す。これは、どちらの目的にとっても大切なことです。教材への興味があるからこそ、細かな特徴にも注意が向きます。「一読者」として、教材そのものを楽しみましょう。一人で取り組むばかりでなく、誰かと共有するのもいい。きつと、自分とは違った読み方に気づくはずですよ。

授業中の子どもの反応から、自分の捉え方を見つめ直す。そう考えると、教材研究は、授業の間や後にも繰り返されるものだといえます。何度も教えたことがある教材でも、何度目かによりよく見えてくるものもあるはず。ぜひ、何度も繰り返し教材研究に取り組んでもらえたらと思います。

（談）



たかき 高木まさき

静岡県生まれ。横浜国立大学教授。中央教育審議会国語専門部会委員、全国的な学力調査の実施方法等に関する専門家検討会議委員などを歴任する。著書に『「他者」を発見する国語の授業』（大修館書店）など。光村図書 小学校・中学校「国語」教科書編集委員を務める。